PART2　書き下し文

●書き下し文…漢字・仮名まじりの日本文に書き改めたもの。

兵少なく食尽く。

不死の薬を荊王に献ずる者有り。

注　荊…楚（国名）の異名。

況んや隗より賢なる者、豈に千里を遠しとせんや。

注　況んや…まして。
隗…人名。賢者。
豈に～や…どうして～か、いや、～ない。

二　書き下し文

＊平仮名は、日本の古典文法に従い歴史的仮名遣いで書く。

① 返り点（三参照）に従って順番に読む。

② **置き字**（第三講で実施）は**書かない**。

③ 漢字は漢字のままだが、**助詞・助動詞として読む漢字は平仮名**にする。

④ 漢字の右下の送り仮名を平仮名で書く。

⑤ **再読文字**（第四講で実施）は**最初の読みは漢字**で、**二度目の読みは平仮名**で書く。

（例）

有リ㆘献ズル㆓不死**之**（の）薬ヲ於荊（けい）王ニ㆒者㆖。

→ 不死**の**薬を荊王に献ずる者有り。

況（いは）ンヤ賢ナル㆓於隗（かい）ヨリ㆒者、豈（あ）ニ遠シトセン㆓千里ヲ㆒**哉**（や）。

→ 況んや隗より賢なる者、豈に千里を遠しとせん**や**。

第1講　PART2　確認問題

①「書き下し文」にするときのルールとして正しくないものを、次の中から選べ。

ア　平仮名は、日本の古典文法に従い、歴史的仮名遣いで書く。
イ　返り点に従って順番に読む。
ウ　置き字は書かない。
エ　漢字の右下の送り仮名をカタカナで書く。
オ　助詞・助動詞として読む漢字は平仮名で書く。

②「城春ニシテ草木深シ。」を書き下し文にしたものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　城春ニシテ草木深シ。　　イ　城は春にして草や木も深し。
ウ　城春にして草木深し。　　エ　城春にして草木深い。

③「花ハ咲キ、蝶ハ舞フ。」を書き下し文にしたものとして最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　花ハ咲キ、蝶ハ舞フ。
イ　花は咲き、蝶は舞ふ。
ウ　花わ咲き、蝶わ舞う。
エ　花は咲き、蝶は舞う。

④ 「四十ニシテ而不レ惑ハ。」を書き下し文にしたものとして最も適当なものを、次の中から選べ。（なお、「而」は置き字である。）

ア　四十ニシテ惑ワズ。
イ　四十にして惑は不。
ウ　四十にして惑はず。
エ　四十にして而惑はず。

⑤ 「学ンデ而不レバレ思ハ則チ罔シ。」を書き下し文にしたものとして最も適当なものを、次の中から選べ。（なお、「而」は置き字である。）

ア　学ンデ思ハザレバ則チ罔シ。
イ　学んで而思はざれば則ち罔し。
ウ　学んで思は不れば則ち罔し。
エ　学んで思はざれば則ち罔し。

第1講 PART2 確認問題 解答

〔解説〕

①「書き下し文」のルールは、①返り点に従って順番に読む。②置き字は書かない。③助詞・助動詞として読む漢字は平仮名で書く。④漢字の右下の送り仮名を平仮名で書く。⑤再読文字は最初の読みを漢字で、二度目の読みを平仮名で書く。という五つに加え、基本として平仮名は歴史的仮名遣いで書く、というものである。

② 訓読文（訓点のついた状態の文）に返り点がついていないので、通常のように上の漢字から下の漢字の順に読んでいく。その際、漢字の右下の送り仮名は平仮名に直して書く。

③ ②と同じく返り点がついていないので、上から下に読んでいけばよい。その際、歴史的仮名遣いで書かれた送り仮名はそのまま平仮名にあてはめて書く。ただし、助詞の「は」は「わ」には直さず、そのまま書くことに注意する。

④ 第4講で改めて学習するが、「而」は置き字であるため、書き下し文に直す際には書かない文字となる。また、「不」は助動詞として使用されている文字であるため、平仮名に直して書く。「ず・ざ（る）」などのように使われる。

⑤「不」は助動詞として使用されており、活用によって「ず」以外にも「ざ＋送り仮名」となるので、注意して平仮名に直す。引用文は「〜れば」と送り仮名があるので已然形で書き下す。

〔解答〕

① エ　② ウ　③ イ　④ ウ　⑤ エ